

# 山口県における 2016 年の スギ・ヒノキ花粉飛散のまとめ

〔報告：山口県医師会理事 沖中 芳彦〕

昨シーズンは、県内測定施設の平均値として、約 2,400 個/cm<sup>2</sup> というスギ花粉総数を予測しましたが、雨の日が多かったためか、実測値は予測の約 65% の 1,570 個/cm<sup>2</sup> でした。今シーズンは、前年秋のスギ雄花の着花状態から、1,750 個/cm<sup>2</sup> という予測をしました。着花率自体は前年よりも低かったのですが、予測通りに飛散すれば、前年を上回る値となり、また今シーズンはエルニーニョの影響で暖冬となると言われており、さらに少雨となれば予測以上の飛散になることを心配していました。

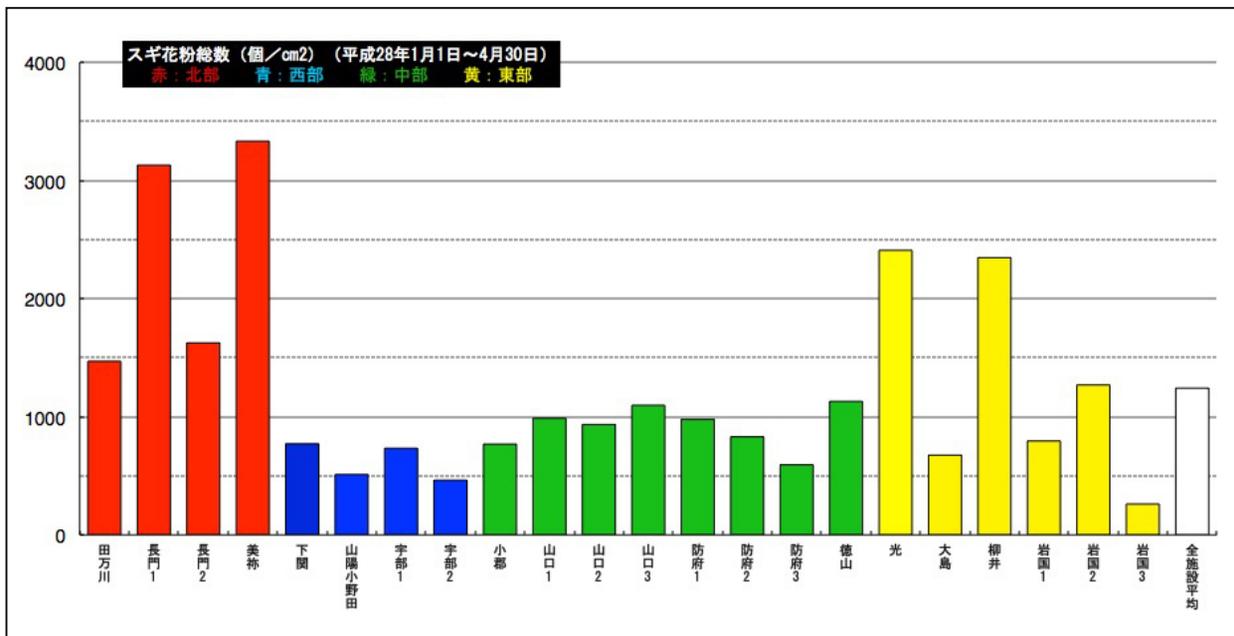
ところが実際には、スギ花粉の飛散期に雨や雪の降らない日が 3 日と続かないというように降水機会が多く、特に 2 回の大量飛散日の翌日にいずれも雨が降ったことや、山口宇部空港が閉鎖されるほどの大雪も含めて、何度かの降雪もあったことから、スギ花粉飛散総数の実測値は予測の約 70% の 1,240 個/cm<sup>2</sup> と、予測を下回る数と

なりました。しかし、気象の影響を考えれば、ほぼ予測通りの飛散であったと思います。

地区別の飛散をみると、北部の長門・美祢や東部の光・柳井で多かったのは例年通りですが、中部地区の飛散が比較的少なかったように思います（図 1）。なお、今シーズンのスギ花粉飛散開始日は 2 月 8 日で、最多飛散日は 3 月 5 日でした。

一方、ヒノキの前年秋の花芽の着き具合は、北部の観察定点において、これまでで最も多かった 2013 年の 2,330 個や 2 番目に多かった 2011 年の 2,200 個と同等の着花状態と思われました。しかしながら、実際の飛散は 4 月 30 日までで約 390 個/cm<sup>2</sup> の平均総数であり、非常に少なかった昨シーズン（170 個/cm<sup>2</sup>）の倍以上にはなりませんが、平年値（990 個/cm<sup>2</sup>）を大きく下回る少ない捕集数で終了しました（図 2）。地区別の飛散分布はスギとほぼ同様で、最多飛散日は 4 月 2 日でした。

図 1 測定機関別スギ花粉総数



スギは前年の 11 月の時点で、既に花粉を蓄えている「花」であるのに対し、ヒノキは同時期には「芽」に過ぎません。その後成長して花になり花粉も形成されるのですが、花粉の形成はその間の気象条件にも影響されるものと思われま

す。日照時間が少ないと雄花が十分に成熟しないことも考えられます。また、雪が多いと重みで木の枝が折れることもあります。実際、ヒノキの雄花が黒っぽく変性しているものが 30～40% を占める木も認められました（図 3、4）。しかし、定点の観察木にはやはり多くの成熟した雄花が着

図 2 測定機関別ヒノキ花粉総数

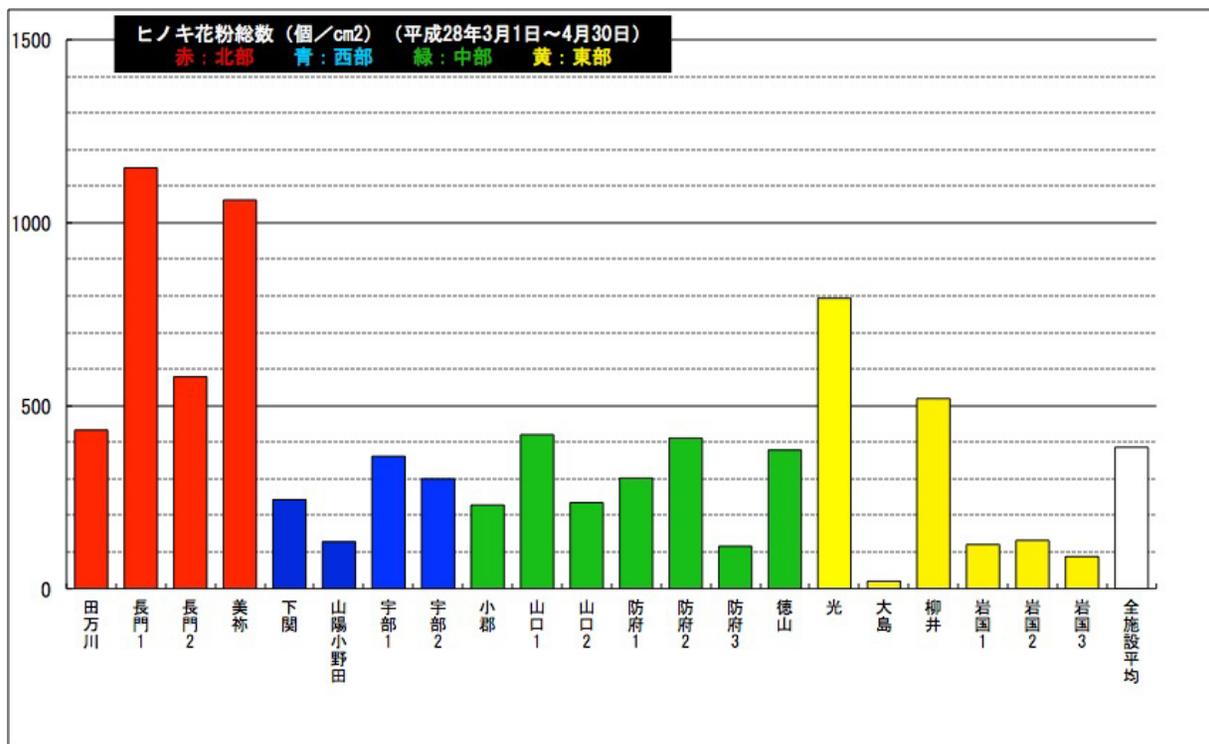


図 3 北部地区のヒノキ（2月7日）  
枝先が断裂して雄花が消失している



図 4 中部地区のヒノキ（3月27日）  
黒ずんで正常の形態ではない雄花が約 40%認められる



いていました（図 5、6）。この状態で、ここまでの少ないヒノキ花粉飛散に終わった理由は、残念ながら不明です。

これまでスギ花粉総数は表年・裏年の表れとして、前年より多い・少ないを交互に繰り返して

きましたが、昨シーズン・今シーズンと初めて 2 年連続で前年を下回りました（図 7）。また 2016 年のシーズンが終わった時点でのスギ花粉総数の平年値（直近 10 年間の平均）は 2,530 個/cm<sup>2</sup> となり、2 年連続して平年値も前年を下回るこ

図 5 北部地区のヒノキ（4 月 3 日）



図 6 北部地区のヒノキ

（図 5 とは別の木、4 月 3 日）



図 7 年別スギ・ヒノキ花粉総数

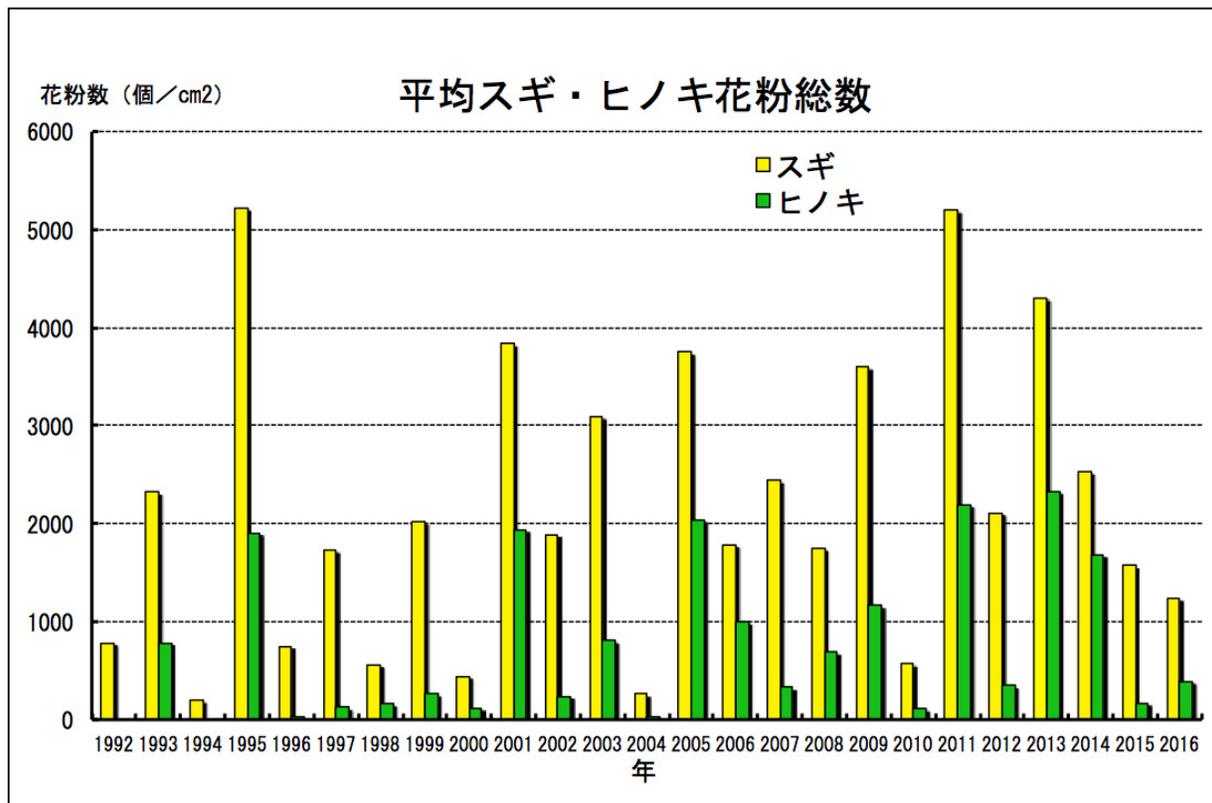
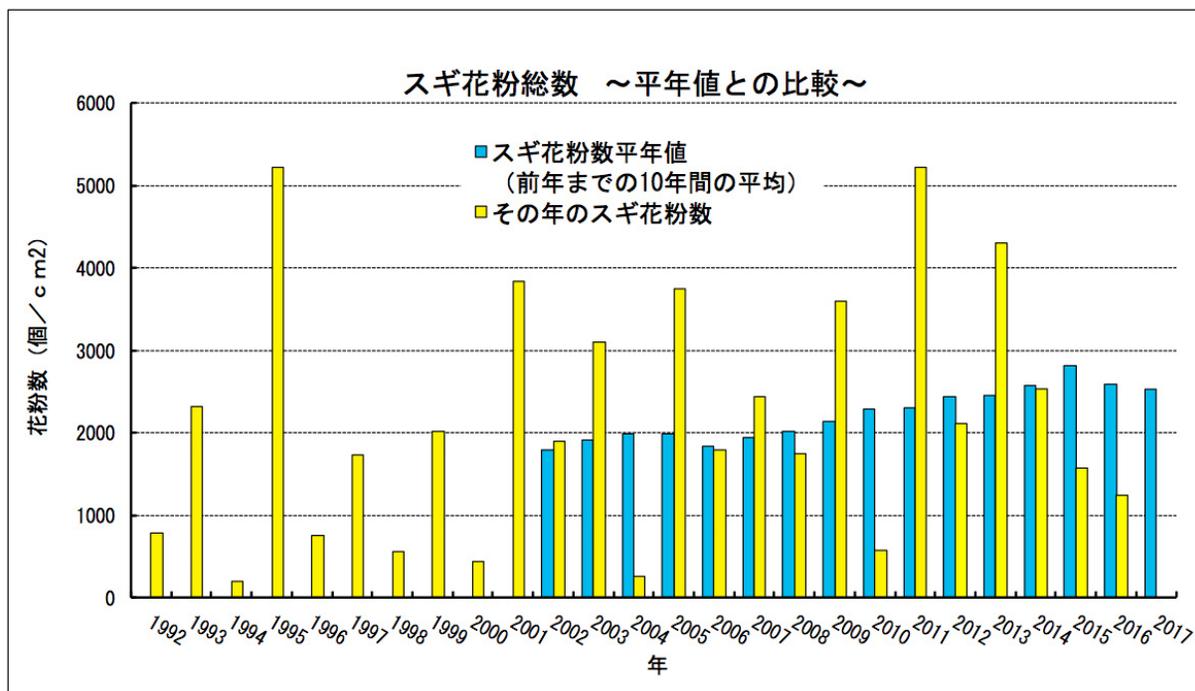


図 8 スギ花粉年値と実測値



になります。また、3年連続して、その年のスギ花粉総数が平年値以下となりました(図8)。ここ数年のうちに花粉飛散の最も多い地域である光、平生の測定施設が測定を中止されたことも、平均値の低下には影響があると思われますが、この2年間はスギ雄花の着花率が比較的少な目であったことは間違いありません。2000年以降増

え続けてきたスギ花粉飛散が頭打ちになってきたのでしょうか。単にここ2年間の前年夏の気象条件がスギ雄花の分化に好都合でなかっただけなのでしょうか。来シーズンのスギ花粉飛散に影響すると考えられる、この夏の天候が気になるところです。